馬冷池と不動院

『真言宗、御室派で本尊は大日如来。その昔は聖徳太子の建立といわれ、三町四方七堂の伽藍があり、三国一の霊地であった。また古記録では奈良時代に光明皇后が再建され、その後破壊され、文明１５年（1483）高田城主の当麻為長が建立したといわれる。そばの馬冷池（ばれいいけ）の名は、高田氏が戦陣往来に際して馬を洗い冷やしたことに由来するそうだ。

本堂は国の重要文化財で五間四面の寄棟造り。本瓦葺。本尊大日如来は鎌倉時代の優秀作。当麻氏滅亡後の寺の沿革は明らかではないが、江戸時代中頃には村堂となった。明治６年廃寺となるが大正５年頃再興された。（高田市教育委員会）

天神橋通りと下街道

不動院の前の東西の商店街が天神橋商店街で、東端にある天神社が名前の由来。高田川はかつて市内中心部を流れていたが、昭和１０年代の川替えで橋は撤去され、川は中央道路になった。商店街の名は以前の名残りでこの商店街は戦前からあった。他に古川橋とか好仁橋といった場所があるが、いずれも市中に川が流れていた時の名残り。

天神社の北の JR 高田駅の近くに、かつて日紡（ユニチカ）の赤レンガの工場が並んでいた。明治２９年の操業で昭和５３年に閉鎖、最近まで操業していたのである。

馬冷池公園に幕末の志士「梅田雲浜の顕彰碑」があるが、妻の千代子が高田村の村島内蔵進の娘という縁で高田と関係があった。

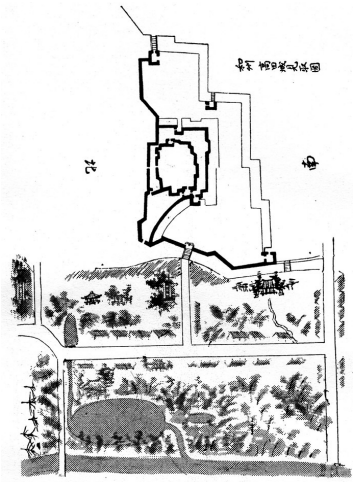
不動院の横の南北の道は下街道（高野街道）で、郡山から高田を通り五条に至る奈良の主要街道のひとつ。市中の初瀬街道と交差する地点に大正１１年設置の道路元標がある。

不動院の向かいの高田基督教会は明治 20 年の建物で、基礎に使用されているレンガや椅子などの家具はイギリスから輸入したもの。小屋組はハンマービーム構造で開放的な空間を作っている。（写真上）

左の写真は、その下街道にある現在も営業中の風呂屋さん、昭和レトロというより江戸時代の雰囲気ではないか。

高田城址

『高田城は中世、平田荘々官、高田為貞（本姓当麻氏）の築くところ、のち大和武士として成長し、応仁から戦国時代最も強盛であった。天正８年、織田信長の大和検地に従わず城地を没収され、つづいて筒井順慶の侵攻に合い、天正１１年８月、高田城主一族は滅んだ。城址背後の常光寺には、戦国将士の三界萬霊碑（天文２４年）がある。（現地説明板）』



和州高田城見取図（天理大学図書館蔵）

説明板の高田為貞が高田城を築くのは永享４年（1433）。当時為貞は有井城（正行寺）に居たが、高田城には嫡子の為秀が入り、この頃から高田城が一族の本拠になったようだ。

高田城が築かれる頃は、後に「大和永享の乱」と云われる大和中を巻き込む抗争の時代で、国中の地侍衆は北和の筒井氏と南和の越智氏の党派に分かれ、戦闘を繰返していた。この中で高田氏は筒井衆の一派として行動していたようだ。

永禄年間（1560 年頃）の多聞院日記に高田城の記事がある。

『惣回りに堀を二重に濠り、「モカリ」をユキ廻して、二間三間に「ナルコ」を懸けて、厳しく攻め立てるといえども更に落ちず、高名一身の面目也――」

図の「和州高田城見取り図」には、確かに内堀と外掘りが描かれている。図を書いたのは明治の大和高田出身の画家の野沢寛氏。戦国末期に高田城は跡形もなく破壊されるが、画家は故郷に残された古い記憶を元に描いたのであろうか。

多聞院日記の記事は織田信長の桶狭間の頃で、この時代大和では松永弾正と筒井順慶が覇を競っていた。高田氏はこの頃松永弾正に与しており、記事は筒井方に攻められて籠城した時のことで、城がいかに堅固だったかを伝えている。しかしこの後、松永弾正は信長の支援を受けた順慶に破れ、信貴山城で滅ぶことになる。高田衆は筒井傘下に下るが許されず、信長の代官明智光秀の命で、時の城主高田為国は中ノ坊（當麻寺？）で処断される。天正８年のことであった。

しかし高田氏が滅ぶのはそれから３年後の天正 11 年のことで、筒井順慶も死に時代が豊臣に移ってからのことである。

その頃、為国の孫の高田為政は高田の地に潜み、家の再興を図って新しく大和の国主になった豊臣秀長に接触しようとした。彼には確信があった。それは彼の家が他の土豪と違い、古代豪族の當麻氏の血筋だということだった。そして或る日為国は秀長の呼び出しを受ける。一縷の望みを抱いて大和郡山に上った為国を待っていたのは､死の宣告であった｡卑賤の身から身を起こした支配者にとって、古代の権威など何の役にも立たないことを、彼は知らなかったのである。